

E・H・カーのリアリズムの起源と『ドストエフスキー』の影響

河村, しのぶ
元九州大学大学院法学府博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/4776868>

出版情報：総合文化学論輯. 15, pp.1-23, 2021-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。

E・H・カーのリアリズムの起源と『ドストエフスキー』の影響

河村 しのぶ

はじめに

本稿は、E・H・カー(Edward Hallett Carr 1892-1982)の著作『危機の二十年』(1939)におけるリアリズムの起源が、ドストエフスキー著『地下室の手記』(1864)に対するカーの解釈にあることを明らかにすることを目的としている。

『地下室の手記』に対するカーの解釈は、カーの著したドストエフスキーの伝記である『ドストエフスキー』(1931)の書中に記されている。

『地下室の手記』において、ドストエフスキーは、人間は「こうあるべき」という観念や「こうありたい」という願望を収去した。

そして、人間の非合理性をありのまま直視し、それを受容する必要性を打ち出した。

本稿は、このドストエフスキーの人間観に、カーが影響されて、自身の国際政治思想を構築していることを明白にする。

このために、本稿は、第一に『地下室の手記』に対するカーの解釈をテキスト分析する。

そして、その解釈の鍵概念になるのが「虚飾の収去」であることを論じる。

それにより、『危機の二十年』におけるリアリズムの起源が、カーが『地下室の手記』を解釈した際に獲得した「虚飾の収去」であることを提示する。

本稿は「虚飾の収去」とは、「こうあるべき」という観念や「こうありたい」という願望を収去して、事象をありのまま直視し、受容する視座や姿勢と定義する。

第二に、このことを論証するために、『危機の二十年』におけるカーの議論の構図が、一貫して、ユートピアニズムの非現実的な願望の虚飾をリアリズムを用いて収去していることを明らかにする。

本稿の構成は、第一に、先行研究の概観を行う。

第二に、『地下室の手記』に対するカーの解釈を分析し、非合理性の受容がリアリズムの起源であることを示す。

第三に、そのことを論証するために、『危機の二十年』におけるリアリズムが一貫して「虚飾の収去」として用いられていることを明らかにする。

そして、最後に結語を著すこととする。

I. 先行研究の概観

これまでのカー研究は、以下に述べるように、七つの傾向に、分類されると考えられる。

それらには、第一に、カーの学説史上の位置をめぐる研究群がある。

第二に、カーが現実主義者¹として認知されてきた研究の傾向がある。

第三に、カーの理想主義者的側面に着目する研究群がある。

第四に、カーを現実主義者でもなく、理想主義者とも異なるタイプの理論家として捉え直すものが出てきている。

第五に、カーの知的営為と彼の生きた時代との関係性について考察するものがある。

第六に、カーの具体的政策論に関する研究がある。

第七に、国際政治学という学問と他の学問領域の垣根を越えて、カーを研究する動向がある。

これらの七つの研究傾向のうち、第一の傾向から第六の傾向に関する議論は、すでに数多くなされてきた。

よって、本稿では、第七の研究傾向について、検討することとする。

七つ目のカー研究の傾向として、国際政治学を超えて学問領域横断を試みる先行研究がある。

その中には、カーが国際政治学についての論稿を著す以前に携わった、伝記作品に関する研究群がある。

この研究群には、代表的なものとして、Molloy 2003、Fiott 2010、Nishimura 2011、西村 2010、西村 2012 がある。

これらの各論者の議論を検討する前に、ここではまず、学問領域を横断する研究とは、何かについて、説明をする。

カーは、実に四つもの学問分野の研究に携わった人物であった。それらの学問分野とは、次の四分野である。

一つ目は、カーが 1930 年代初頭に携わった文学書評の投稿や伝記作品執筆という文学である。

¹ 本稿は、「現実主義」という語と、「リアリズム」とを意図的に区別している。理由は二つある。第一に、検討の中心をなす先行研究である西村 2012 が用いていたため、西村の研究の検討においては「現実主義」という表記を使用した。第二の理由は、「現実主義」は西欧的国際政治学で定義されているように、国際社会における国家、国益、軍事力の役割を重視することを表す。対照的に本稿の用いる「リアリズム」とは、ドストエフスキーに代表されるとカーが信じた、ロシア的思想に大きく影響されており、本稿の議論で検討されるように、「理想と現実の齟齬を衝き、その結果獲得する現実認識」という意味を持つ。このため、両者を区別した。

第二に、1939年に国際政治学の古典である『危機の二十年』を著し、議論を巻き起こした国際政治学がある。この著作により、異論があるものの、一般的にカーは、国際政治学の祖とみなされてきた²。

そして、第三の学問領域として、歴史哲学がある。

この領域における彼の業績は、歴史哲学の古典として知られる『歴史とは何か』(1961)に代表される。

最後に、四つ目の学問分野はソビエト・ロシア史学の研究である。

カーは1950年代から彼が逝去するまで、ソビエト・ロシア史学に取り組んだ。この領域において、彼が膨大な研究成果を後世に残したことは有名である。

元来、カーについての研究は、伝記作品を包含する文学の領域について、ほとんど行われてこなかった。

しかし、国際政治学、歴史哲学、ソビエト・ロシア史学については、隔たれた三つの学問分野として、別々に研究されてきた。

1990年代に入ると、イギリスを中心に、カーを学問分野の垣根を越えて研究する動向が現れた。

山中仁美はこの動向を「三人のカーから一人のカーへ」と呼んでいる(山中2003)。

「三人のカー」とは「国際政治学のカー」、「歴史哲学のカー」、「ソビエト・ロシア史学のカー」である(山中2003)。即ち、それは、三つの学問領域ごとに研究されてきたカーを「一人のカー」として捉える試みである。

このように、学問分野を横断してカーの思索を研究する動向が現れても、彼の伝記作品は、顧みられることは少なかった。

しかし、2000年を過ぎた頃より、ようやく、カーの国際政治思想の誕生の背景として、伝記作品の研究が注目を浴び始めた。

そのような研究の代表的なものとして、先述の Molloy 2003 や西村 2012 などがあるということである。

Molloy 2003、Fiott 2010、Nishimura 2011 は、『ドストエフスキー』と『危機の二十年』との関係しか扱っていない。

『ドストエフスキー』から『マルクス』までのすべての伝記作品と『危機の二十年』を分析し、伝記作品、即ち文学と国際政治学の垣根を越えて、カーの思想の一貫性を検討することの重要性を唱える文献は以下の二つである。

² Lucian Ashworthなどは、カーが国際政治学の祖であることに異議を唱えており、これに関する論争は現在も進行中である。

それらは第一に、西村邦行が2010年に発表した「知識人としてのE.H.カー：初期伝記群と『危機の二十年』の連続性」という論文である。

その第二は、西村によって2012年に上梓された『国際政治の誕生—E.H.カーと近代の隘路—』という著作である。

この点において河村は2021年の論考の中で、西村の研究は、国際政治学以外の研究領域を考慮し、なかでも伝記作品に着目して、すべての伝記作品がカーの思索において重要であったことを最も明瞭に唱え、連続するカーの問題意識の存在を、テキスト分析を通じて指摘している（河村 2021）とする。

その上で河村は西村の研究にも検討すべき課題があると述べた（河村 2021）³。

第一に、西村の著作においては、近代現実主義と近代理想主義の枠組みの中で『危機の二十年』が論じられているため、伝記群の意義が消極的であり、伝記群自体が過小評価されているのではないか。

伝記群で得られたと西村が主張する「人間の非合理性の問題」が『危機の二十年』に流れ込んでいるように解釈するのが難しい。

つまり、西村著作では、近代理想主義と近代現実主義という枠組みを立てることによって、『危機の二十年』と伝記群との連続性がなくなっているのではないかと考えられる。

西村論文では、「思想・理論と実践の一致」という点において、連続性を示そうとしているため、問題がない。

しかし、西村著作は、「思想・理論と実践の一致」が鍵概念になっていないため、伝記群と『危機の二十年』との連続性が不明確であるように思われる。

第二に、西村著作の議論の冒頭では、理想主義と現実主義という構図に反対しているが、結局、彼の議論は最終的には、西欧思想史における現実主義対理想主義という枠組みに陥っているように見受けられる。

国際政治学の枠外に視野を広げてカー研究を行う重要性をせっかく提示しているにもかかわらず、国際政治学の枠内での議論になっているのではないだろうか。

第三に、西村の論文、即ち、西村 2010 は、「思想・理論と実践の一致」が鍵概念となっており、伝記作品と『危機の二十年』のつながりは、確かにわかりやすい。しかし、彼の著作に比べて、細やかなテキスト分析を行っているとは言い難い⁴。

³ 以下の西村 2012 に関する第一から第三の点についての考察は、河村 2021 において詳しい検討が為されている。

⁴ これには紙幅も関係しているかとは推測できるが、カーからのテキストの引用や論証は、西村の著作の方が論文に比べると、はるかにきめ細かい。

第四に、西村 2012 のたどりついた結論には、再度検討されるべき余地があるのではないか。

カーが取り組んだ、国際政治学以前の学問分野である伝記作品の研究をすることにより、カーの国際政治思想を採求しようとする本稿は、西村の研究に大きな影響を受けている。

それにもかかわらず、本稿の結論は、西村 2012 の結論を全面的には、受け入れるものではない。

西村 2012 は、既に相対主義的な時代において、カーは理想主義的でありすぎた事実こそが、カーの議論が普遍的なものを導きえなかった理由であると論じた（西村 2012、170 頁）。

このことを理由として、1930 年代初頭以来進められてきたカーの一連の思索は、失敗という形でその第一幕を閉じたのであったと、西村 2012 は結論付けている（西村 2012、170 頁）。

しかしながら、この結論が再検討に付されるべき第一の要因に、カーの思索は、本当に失敗に終わったのかという点がある。

山中仁美は、西村 2012 についての書評の中で、同書が国際政治学の「誕生」に関する研究において、多大なる貢献を果たしていることと、その緻密なテキスト分析を称賛する。

一方で、彼女は、カーの思索は失敗に終わっているという、モーゲンソーの 1948 年の議論と同じ結果に西村 2012 が至ったことを指摘している。

そして山中は、西村 2012 が「モーゲンソーを超えるカー像を打ち出しているのか」と問うている（山中 2014、479 頁）。

カーの国際政治学領域の思索にしか、関心を向けなかったモーゲンソーと、カーの伝記作品を丹念に分析した西村 2012 がなぜ、同じ議論に至ったかを、検討することは、非常に重要となってくるであろう。

二つ目の要因に、西村 2012 においては、歴史主義等の西欧の知識や思想にカーの現実主義が、大きく影響されたと解釈する（西村 2012、123-132 頁）。

しかし、それをドストエフスキーの研究を通して影響されたロシア的思想に、起源を求める研究の発展の可能性もある。

カー自身がロシア的なるものと考えた「ロシアの精神」に、西村 2012 が解釈するより、はるかに直接的な影響を、カーが受けているという解釈も成り立つ。

本稿は、そのような可能性の模索として、次節以降、議論を展開していく。

以上、第七の研究傾向である国際政治学の領域外に視野を向ける学問領域横断の研究、より具体的には、伝記作品に着目する研究群を概観した。

次節では、本稿の命題を論証するために、カー著『ドストエフスキー』に著されている、ドストエフスキーの作品『地下室の手記』に対するカーの解釈を分析する。しかし、その前に、次節の第一項では、『地下室の手記』に対するカーの解釈をより深く理解できるように、カー著『ドストエフスキー』の構成を概観する。

II. 『地下室の手記』

1. 『ドストエフスキー』の構成

カーの最初の著作である『ドストエフスキー』は、第一巻から第四巻までの四巻によって構成されている。第一巻は「成長の時期（1821-1854）」と名付けられており、五章からなっている。

第一巻は、作家フョードル・ミハイロヴィッチ・ドストエフスキーの幼年時代から始まり、冤罪で流刑されたシベリアからの解放直後に書かれた小説『死の家の記録』までについて、書かれている。

第二巻は「激動の時代（1854-1865）」と題されている。この巻も五章構成となっている。ここでは、最初の結婚から、ドストエフスキーと彼の妻以外の女性たちとの関係性について詳しく書かれている。

第三巻は「創造の時期（1866-1871）」と題されており、ドストエフスキーに作家としての円熟期が訪れた時期として描かれている。ドストエフスキーの外遊と、彼が著した五大小説のうち、『罪と罰』、『白痴』、『悪霊』について書かれている。

最後に、第四巻「結実の時期（1871-1881）」は、ドストエフスキーの五大小説の他の二作、即ち『未成年』、『カラマーゾフの兄弟』の二作と、その他にも、ドストエフスキー晩年の著作『作家の日記』という作品について記されている。

本稿が、次節から分析していくカーの解釈は、『地下室の手記』というドストエフスキーの作品を対象としている。カー著『ドストエフスキー』では、『地下室の手記』についての論述は、第二巻中の第九章に現れる。後述するように、カーは『地下室の手記』をドストエフスキーの晩年の五大小説で取り扱われる彼の哲学への最初の進出であると位置づけている。よってカーは『ドストエフスキー』の構成においても、五大小説についての解釈を論じていく直前に、『地下室の手記』に対する解釈を論じている。

以上、『ドストエフスキー』の構成について概観した。以下からは、カーの『地下室の手記』に対する解釈を分析していく。その第一として、次項では、カーによる『地下室の手記』に対する評価を検討する。

2. カーによる『地下室の手記』に対する評価

カーが、『地下室の手記』に対して、高い評価を与えていることは、明らかである。なぜなら、カーは『地下室の手記』を「独創的」であり、「重要な作品」と評しているためである(119)⁵。このことは、以下に記すカーの文章にも、如実に表れている。

『地下室の手記』は、ドストエフスキーの、より偉大な作品の原動力となった、果てしなく広がる慈愛と寛容を欠いている。それが書かれた際の苦悩と錯乱を、あまりにも反映しすぎている。この作品は、それにもかかわらず、ドストエフスキーの発展において、重要な地位を占めている。これは、彼の哲学への最初の進出である。そして、ある意味では、彼の一連の傑作小説への序章を成しているのである(119)。

別の箇所でも、カーは、いかにこの作品が独創的であることを述べている。カーは、この作品が二部構成になっていることを述べ、第一部を「悪意の哲学の解明」と呼んでいる。そして、第二部を「語り手とみなされている意地の悪い男の生涯の一事件、もしくは、より適切には一連の事件」を物語っているものであると記している(119)。

その上で、カーは、『地下室の手記』を以下のように評している。

しかしこの一風変わった形式によって、『地下室の手記』は、これまでドストエフスキーが書いた、いかなるものと比べても、より独創的である(119)。

さらに、カーは、この作品の「不断な喜びは、読者のみでなく、一般の世間に対しても、また自らに対しても、舌を出すことなのだ」という解釈を示している(119)。

そして、評論家であるロザノフという人物にまつわる挿話を交えて、カーは、この解釈を強調する。ロザノフは、『地下室の手記』の出版後、何年も経過してから、この作品に触発され、彼の著作の中で最も気まぐれなある作品を書いたことをカーは記す。そして、ロザノフがこのように言ったことを、カーは特筆する。「もし、自分の彫刻が建てられるとするならば、読者に向かって、ペロリと舌を出している姿にしてほしい」(119)。これに続けて、カーは、次のように主張する。

⁵ 本節において、これ以降、著者名や出版年がなく、括弧内に数字のみを記している箇所は(Carr 1931)のページ数を意味する。

これは、地下からの男の態度を正確に表現している (119)。

カーの『地下室の手記』に対する解釈は、「人間の非合理的側面の受容」という問題と結びついている。そして、彼の解釈は、『地下室の手記』をチェルヌイシェフスキーの作品『何をなすべきか』(1863)に対比させることによって、鮮明に浮かび上がってくる。チェルヌイシェフスキーは、ロシアの革命的民主主義者であり、急進的政治評論家であった。

以上、カーの『地下室の手記』に対する評価を考察した。これまで論じてきたように、カーは、『地下室の手記』を高く評価している。それは、この作品が独創的であり、ドストエフスキーの晩年の五大小説で取り扱われる彼の哲学への最初の進出であるためである。既述のように、この作品の哲学的意味は、チェルヌイシェフスキー著『何をなすべきか』との対比により、鮮明になる。よって、次項では、『地下室の手記』と『何をなすべきか』のカーによる解釈と対比を分析していく。

3. 『何をなすべきか』との対比

『地下室の手記』が書かれた前年、チェルヌイシェフスキーの小説である『何をなすべきか』と題された作品が上梓された。カーは、この作品に対する答えこそが、『地下室の手記』であると論じる (119)。

カーはチェルヌイシェフスキーを「急進的政治評論家」であり、「J・S・ミルの弟子」と評している (119)。

そして、カーの解釈によると、チェルヌイシェフスキーの作品である『何をなすべきか』は、「ユートピア的社会状態を描いており、そこでは何人であっても一切拘束を受けず、自らの合理的な欲望を追求することで、完全な幸福が獲得されるのである」ということを論じているという (119)。

カーの『何をなすべきか』に対する解釈は、以下の文章に最も明確に表れている。

J・S・ミルの弟子であるチェルヌイシェフスキーには、理性と利己主義とが道徳の唯一の裁可であると思えているのである。人間は、自己の利益の本質を誤解するためにのみ、悪事を行う。したがって、知的啓蒙こそが正しい行動への間違いのない道である (119-120)。

以上のように、カーはチェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか』を合理主義倫

理学の古典的名声として総括している。チェルヌイシェフスキーは、道德の基礎となるものは社会的幸福であり、社会的幸福は合理的な自己利益の追求の産物であると主張する。その主張を、カーは合理的な西欧の精神の失敗を認識しながら、批判的に捉えている。このことは、続く『何をなすべきか』と『地下室の手記』との対比の部分において、明らかである。

カーは、両作品を対比させ、『地下室の手記』とは「このチェルヌイシェフスキーの哲学に対する答えである」という文章を以って、人間の非合理的側面の指摘を始めている。

すでに、この頃までに、ドストエフスキーの最も強い確信の一つとなっていたのは、人間の本性はチェルヌイシェフスキーのような楽観的功利主義者らが信じていたように、根本的かつ本質的に善であるなどということはないということである。即ち、人間は、その本性のある一面に基づいて悪を悪と知りながら欲したり、選んだりする可能性があるということであった (120)。

カーは、このようなドストエフスキーの確信が、『地下室の手記』において、初めてその姿を現すことを指摘している (120)。そして、カーは『地下室の手記』からの次の引用を示している。やや長い文章ではあるが、カーが意図して引用したこの箇所には、カーがドストエフスキーの論じた人間の非合理性に対する強い関心と賛同を著す箇所であるため、次にその部分を記す。

一体だれなんだ、こんなことを初めて言いふらしたのは？人間はその真の利害を知らないからこそ、悪者のように振る舞うのだ、だからもし賢くなったら、その真の正しい利害に眼が開けたら、人間はすぐに悪者のように、振る舞うのをやめて、善良な、そして尊敬すべきものとなるだろう、何しろ、無知ではなくなり、その真の利益を理解するからには、必ず善の中にその利益を見つけ出すだろうから、なんて。…ああ、素晴らしい若者よ。ああ、天真爛漫な赤子よ (120)。

したがって、ドストエフスキーの人間観によると、自己利益を合理的に追求することは、人間が行動すべき究極の手段ではない。幸福と合理的自己利益の間の、目的と手段の問題は、もはや道德の究極の指針とは言えないと、カーは解釈している (120)。「1864年にドストエフスキーが主張した大胆な逆説」とカーが呼ぶものを、彼は以下のように総括している (120)。

ドストエフスキーは、このように論ずる。人間の全歴史とは、非合理性の記録である。人間は、アリ塚のアリのように、建設することを好むかもしれないが、しかし、そのまた他方で、破壊を愛するものである。人間は、理性の専横、つまり、「二の二倍は四である」という型から自己を開放するためにのみ、気まぐれにふけり、自らの利益に反して、故意に罪を犯すことを愛する（120）。

既述のように、カーはチェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか』を「ユートピア的」と評している。『地下室の手記』は、『何をなすべきか』に対して、反ユートピアでもなく、チェルヌイシェフスキーの論理を批判することでもなく、合理主義的な概念とは根本的に異なる人間の本質を提示することによって、応答しているとカーは捉えている（120）。

さらに、『地下室の手記』では、人間が非合理的側面を有していることに対して、正面から向き合い、そのことを受容する必要性が示されているとカーが、解釈していることもうかがえる（120）。

人間の非合理的側面を受容することは、人間がこうありたい、もしくはこうあるべきであるという、「ユートピア的」な観念に基づき、人間のありのままの姿を見えにくくしている虚飾を取り払うことである。虚飾を取り払い、あるがままの姿を明らかにするということは、カーがのちに『危機の二十年』で論じるリアリズムの定義と合致する。カーのリアリズムの定義は、「事実の容認、および、事実の原因・結果の分析に重きを置く考え方」である（Carr 1939, p.14）。

このことから、『危機の二十年』において用いられる分析の方途であるリアリズムの原型は、カーがドストエフスキーの研究、より具体的には『地下室の手記』の分析を通じて得た、「人間の非合理性に対して虚飾を取り払い、あるがままに受容すること」の重要性であると考えられる。

以上、本節は、チェルヌイシェフスキーの著作『何をなすべきか』と、ドストエフスキー著『地下室の手記』を対比したカーの記述を分析してきた。カーが人間の非合理性を直視し、それを受容することの重要性を論じるドストエフスキーの人間観に影響されている様を明らかにした。そして、リアリズムの原型が、『地下室の手記』に対するカーの解釈にあると考えられることを示した。

次節では、虚飾を取り払い、事象をあるがままに受容するという、この思考の型が、『ドストエフスキー』出版の8年後にカーが上梓した『危機の二十年』におけるリアリズムの中核となっていることを論じていく。このことにより、本稿は『地下室の手記』に対するカーの解釈が、彼の『危機の二十年』におけるリアリズムと一致していくことを証明していく。

Ⅲ. 非合理性の受容とリアリズムの起源

1. 『危機の二十年』におけるリアリズムの定義

上述の論証を行うために、本節では、第一に、カーによるリアリズムの定義を行う。

カーの著作である『危機の二十年』は、戦間期における自由主義の実態を明らかにしている。同書全体を通じて述べられているように、戦間期において、19世紀的自由主義は普遍的な原理とみなされていた。しかし、この著作は、「絶対的、普遍的原理と信じられているものが、およそ原理という代物でない」という、超越的原理に対する強い批判を著している(111)⁶。そして、絶対的または普遍的原理というものは、各時代の各問題に対処するそれぞれの国家政策でしかないと論じている(111)。

なぜ、1919年から1939年までの戦間期中、最初の十年は、19世紀的自由主義の「ユートピア的仮説があれほどまでに広く受け入れられ、あれほどまでに輝かしい偉業を達成したのか」と、カーは問うている(53)。ここでカーのいうユートピアとは、「容易にかつ普遍的に訴える力をもっている目的、もしくは、観念的な計画」を意味する(8)。

そして、前述のように、広く受け入れられた19世紀的自由主義の仮説は、なぜ戦間期後半の十年において崩壊し、根本からこれを再構築しなくてはならなくなったのかと、カーは続ける。(80)。

この問題をカーは、リアリズムを用いて解明していく。リアリズムとは、「事実の容認及び事実の原因・結果の分析に重きを置くものである」とカーは定義している(14)。

カーは「目的」、「願望」または「観念的な計画」から成り立つユートピアニズムと、「事実の容認と分析」を主眼とするリアリズムを対比させる(14)。そして、その後、ユートピアニズムとリアリズムがバランスを取り合う必要性を論じる。

第一次世界大戦という惨禍の反省から生まれた国際政治学は、二度と戦争を起こしたくないという願望から生まれたと、カーは暗示的に述べている(3-4)。カーはまず、学問の熟成過程というものについて言及し、学問は願望があるところに生まれると論じる。そして「願望は思考の父である」とカーは表現している(5-6)。

しかし、カーは願望の重要性を認めるものの、その願望とは、必ずしも現実的ではないことを強調する。そして、非現実的であるが、明確な目的を持つ「観念的な計

⁶ 本節において、これ以降、著者名や出版年がなく、括弧内に数字のみを記している箇所は(Carr 1939)のページ数を意味する。

画」をユートピア的思考とし、そのような考え方、及びそのような思考をする人々をユートピアンと呼ぶ (8)。

学問は成熟していくうちに、「願望」や「観念的な計画」のみならず、それらの願望に対して、リアリズムによってバランスを図られなければならないとカーは論じる (14)。つまり、「願望」や「観念的な計画」に対して、「事実を容認」することにより、「こうありたい、こうあるべき」という「願望」の虚飾を収去し、あるがままの事実を受け容れることによって、バランスを図ることの必要性をカーは論じているのである。

この議論の型は、言うまでもなく、『地下室の手記』でカーが発見した「虚飾の収去とあるがままを受容すること」と一致する。なぜなら、この議論の型は、『地下室の手記』同様に、「願望」だけでなく、「事実の受容」の重要性を基盤としているためである。

以上、カーの意味するリアリズムの定義について考察してきた。そして『危機の二十年』におけるカーのリアリズムが『地下室の手記』によって表現されている「虚飾の収去と事実の容認」と合致することを示した。

次項では、そのようなカーのリアリズムが『危機の二十年』において、一貫して「虚飾の収去」として、用いられていることを明らかにする。

2. 虚飾の収去としてのリアリズム

カーが、19世紀的自由主義を再構築する必要性を説いていることはすでに述べた。彼は、その再構築のためには、「19世紀的自由主義の崩壊を招いた構造の欠陥を吟味しなければならない」と述べている (80)。構造の欠陥を吟味する方法として、彼が用いるのが、「ユートピア的仮説に対するリアリストの批判を分析すること」である (80)。つまり、19世紀的自由主義における「願望」の「虚飾を収去」して、構造の欠陥を分析するという手法を、カーは重要視しているのである。

ユートピア的仮説に対するリアリズムの批判は以下の五つの検討事項において、最も顕著となっている。それらの五つの事象検討とは、リアリズムの基盤、思想の相対性、国益と普遍的利益、利益と調和性、国際主義という五つの事項である。

よって、これらの事項の検討において、ユートピア的仮説に対し、リアリズムが、どのように批判を加えているかについて、カーの議論を検討していく。

(a) リアリズムの基盤

カーはまず、リアリズムの基盤について説明している。中世期体制崩壊のころ、政治理論と政治的現実のはなはだしい乖離がみられた。その時代に現れたのが、マキアヴェリであった(81)。そして、カーはマキアヴェリの出発点は当時の政治思想であったユートピアニズムに対する痛烈な批判であるとする(81)。

カーは、そのことを強調するために、少し長めにマキアヴェリの言葉を抽出している(81)⁷。リアリズムの根幹的な考え方を反映しているので、本稿も、カーの抽出したマキアヴェリの文章をここに記すこととする。

私の狙いは、それを理解する人にとって有用な事柄を書き留めておくことだったので、物事を想像するよりも物事の真の姿を追いかけることのほうが、私には当を得ているように思えるのだ。というのは、多くの人々は、実際にみたことも納得したこともない共和国や君主国を思い描いてきたからである。つまり、人間が現実はどう生きているのかということと、人間がいかに生きるべきかということとは、あまりに乖離しており、したがって、なすべきことを優先して、今なされている現実を無視する人は、やがて生存よりも、むしろ滅亡を、自らにもたらすことになるからである(81)。

そして、カーはリアリズム哲学の土台として、マキアヴェリ理論のうち三つの本質の見解に着目する。三つのうち第一の本質の見解とカーが考えるものは、歴史とは、ユートピアンに信じるように、「想像」によって方向づけられるものではなく、原因と結果の連鎖であるという考え方である(82)。

第二の見解は、ユートピアンたちの考えるように、理論によって現実が作られるのではなく、現実が理論をつくるのだというものである(82)。

第三にカーが挙げるマキアヴェリの優れた見解は、倫理は政治の機能であり、ユートピアンが主張するように、政治が倫理の機能ではないということである(82)。

以上、リアリズムの基盤について検討した。ここでは、「なすべきこと」ばかり追求せず、現実を直視することの重要性をカーは論じている。即ち、それは、願望や観念的計画の虚飾を収去することであり、その必要性を提示している。

次項では、思想の相対性についての考察において、カーがリアリズムをどのように著しているのかを検討する。

(b) 思想の相対性

⁷ マキアヴェリのどの部分からの引用か、カーは記していない。

次に、カーが思想の相対性について論じている部分において、リアリズムがユートピアニズムをどのように批判しているかを検討する。

思想の相対性を考慮するとき、マルクスが指摘したように、「あらゆる思想は、思想家の経済的利益及び社会的地位に規定される」とカーは述べる (88)⁸。「思想家の利害や環境とその思想との相関性」にカーは注目する (88)。そして次のような結論に至る。ユートピアニズムが考えるように、理論は事態の仮定を創り上げるのではなくて、「理論は、事態を説明するために編み出されるものである」(88)。

そして、リアリストにとっての真実とは、「相矛盾する経験を実用的な立場からある特定の目的ないし当面の都合に合わせて認識するという他に他ならない」とカーは記している (91)。つまり、カーの主張は、「原理は政策から生まれるのであって、政策が原理から引き出されるのではない」というものである。以上のように、ここでも、ユートピアニストのように願望を含む目的を仮定することに対して、リアリストのように、事象に願望を交えず、客観視し、受容する必要性をカーは提示している。次に、国益と普遍的利益におけるリアリズムの検討に移る。

(c) 国益と普遍的利益

こののち、カーの議論は国益と普遍的利益についてのものへと移っていく。先に見た議論にも近いが、次のカーの一説は、リアリズムがユートピアニズムの願望を収去し、あるがままを受容する必要性を強調している。やや長い文章ではあるが、以下に紹介する。

リアリストの仕事は、ユートピア思想を創り上げている構成要素がいかにうわべだけのものであるかを暴露して、非現実的なこの思想の全構造を打ち破ることである。政策や行動を判断するには普遍的絶対基準があるのだというユートピア的な考え方を、リアリストは思想の相対性という武器を使って破壊しなければならないのである。(中略)ユートピアンが利益調和説を説くとき、彼は、天真爛漫にそして無邪気にヴァレフスキーのあの行動原理を採り入れ、しかも世界中に自利を押し付けるために、普遍的利益を装って、その自利を覆い隠しているのだ、ということである。

ダイシーが述べているように、「人間は自分に都合のいい取り決めが他人の利益にもなるのだということを簡単に信じてしまう」のである。公共利益の理論は、これを調べてみればある特定の利益の見事な擬態であり、それは国内問題と同じ

⁸ カーはマルクスの原著のページ数を記載していない。

く国際問題においてもよく見られるのである。ユートピアンは、世界にとって最善であることは自国にとっても最善であると主張し、次にこれを裏返して自国にとって最善であることは世界にとっての最善であると読む (96-97)。

イギリスの多くの論者たちは、戦間期までに、イギリスの地位の優勢の維持こそ、まさしく人類への義務を果たすことになるのだという理論を擁護してきたとカーは論じる。そして、もしイギリスが石炭置き場や鍛冶工場になっているとしたら、それは我が国のためのみならず、世界のためでもあるという当時のイギリスで支配的であった言説を、カーは挙げている (97)。さらに、このような確信は、第一次世界大戦によって感情的な熱狂と変わっていったことをカーは指摘している (98)。

続いてカーは、第一次世界大戦後は、国力が強くなったアメリカの政策が普遍的正義に一致するというウィルソンらの主張が繰り広げられていくことを論じる。

カーは以下のような鋭い指摘をしている。

支配集団は自らを全体としての共同体と同一視する。さらに、支配集団はその共同体に自らの人生観を押し付けるための目的達成手段—これは下位集団や個人には与えられていない—を有しているのである。(101)。

以上のように、相対性を以って考察すると、国益や普遍的利益も、リアリズムによって、ユートピアニストの虚飾が収去されることをカーは示している。同様な議論は、以下の利益調和説に関しても、展開されている。

(d) 利益調和説

このようなカーの議論を考察してくると、利益調和説についてのカーの議論も、容易に分析されえる。ここでも、カーは、ユートピアニズムの願望をリアリズムによって、その虚飾を収去している。

利益調和説は言うまでもなく、「富裕特権階級」が支持し、彼らに利する仮説となっているとカーは論じる (102)。富裕特権階級に属する人々が、共同体において強い発言力を持つのは明確である。そして、さらに、彼らは共同体の利益と自分の利益とを同一視する傾向があることを、カーは示す。

支配集団の利益を攻撃する者はみな、共同体の利益を攻撃しているのだという非難を公然と浴びせられるのであると、カーは主張する。つまり、支配集団の利益を攻撃する者は、共通利益を攻撃するがゆえに、自身のより高次元の利益をも損なう行動をしていると批判されるのである。

カーは次のように述べている。

こうして利益調和説は、特権集団がその支配的地位を正当化し保持するために、彼らみずからが大真面目に作り上げた巧妙な道義的装置として働くのである (102)。

さらにカーは、支配階級である富裕特権階級の発言力があまりに強く圧倒的であるため、彼らの利益こそ共同体の利益であるという意識が実際に生まれてくることを示す。

19世紀、イギリスの製造業者や商人は、自由放任主義こそが自らの繁栄を支え、自由放任主義こそがイギリス全体の繁栄を支えているのだと確信していた。ゆえに、労働者によるストライキ決行は、製造業者や商人たちという特権階級の利益を損ねるだけでなく、イギリスという共同体全体の繁栄に害をなすと考えられたことをカーは挙げる。そのような考え方は、「恵まれない労働者たちには、都合のよいごまかし以外の何物でもなかったであろう」とカーは述べている (102-103)。

この理論によって、恵まれない労働者たちが社会的に低い位置にとどまることを強制され、彼らがイギリスの繁栄から得るものが、わずかであることは、正当化されたのであった。さらに、イギリス国内に対する分析は、同様に、国際政治にも適用されることをカーは指摘する (103)。

カーによると、19世紀のイギリスの政治家たちは、イギリスの繁栄を促すのは、自由貿易であり、イギリスが繁栄すれば、世界全体が繁栄するのでであると強く確信していた (103)。

イギリスの優位は世界貿易において、その当時は圧倒的であったため、イギリス経済の崩壊は世界規模の恐慌と破滅を意味していたといえる。

カーは、あるイギリスの自由貿易主義者が、次のように論じていたことを記している。

保護貿易諸国は自分勝手に世界全体の繁栄を損なっているばかりでなく、愚かにも、彼ら自身の繁栄をも阻害している。このように、彼らの行動は不道德かつ間抜けである (103)。

しかし、恵まれない国々からすれば、国際的利益調和といわれるものは、ごまかしであり、強者の理論であったとカーは主張する。恵まれない国々は低い国際的地位に甘んじることを強いられ、国際貿易からも利することは、ほとんどなかったことを、

カーは強調する。カーによると、このことは、国際利益調和という理論によって正当化された。

カーは、次のような実態を明らかにしている。

共同体における支配階級は自らの安全と優位を保証する国内平和を切望し、この安全と優位を脅かす階級闘争を非難するが、それと同じく国際平和は、支配的列強に与えられた特別の利益なのである (104)。

さらに、以下のように続けている。

「集団安全保障」や「侵略への抵抗」といったスローガンは、支配的国家群の利益と、世界全体の利益が、平和維持において一致するのだという主張である (104)。

非特権階級は平和の妨害者と決めつけられる。これは、特権階級の「染みの戦法」であるとカーは述べる (105)。

ここでも、カーは「正しい」とされていることが実は、支配的勢力がその地位を保つための「ごまかし」であることを、客観的なリアリズムを用いて露にしている。

(e) 国際主義

以上の議論からいえることは、国際主義という概念が利益調和説の一種であるということだと、カーは述べる (108)。利益調和説の検討で使用した、リアリズムによる方法が、同様に、国際主義という概念にも使用されると、彼は主張する。

したがって、国際主義をその主唱者たちの利益や政策とは別の絶対基準とみなすのは、利益調和説と同様に、難しいとカーは論じる (108)。

「国際秩序」や「国際連帯」というスローガンは、常に自国が、他国にも自国の圧倒的優位を誇示することができるほどの強国、もしくは「持てるもの」の理論なのであるとカーは述べる (110)。それに対して、支配的国家集団に何としても押し入ろうとする、ドイツ、日本、イタリアなどの国家は、当然のことながら、「支配的列強の国際主義に対抗してナショナリズムに訴える」傾向がある (110)。

カーは以下のように主張している。

国際政治において通常公然と唱えられる抽象的原理がよって立つ現実の基盤を暴露することは、ユートピアニズムに対するリアリストの攻撃の中で最も逃げ場のない、そして最も説得力のある部分になっている（110）。

以上のように、本節は、カーの議論に従って、願望を優先させるユートピアニズムを、あるがままの事態を受容するリアリズムで以って、その問題点を露にしてきた。

このように『危機の二十年』における思考の型をみていくと、ちょうどカーが著作『ドストエフスキー』の中で行ったように、『何をなすべきか』というユートピアニズムを、『地下室の手記』というリアリズムを以って対比させ、バランスをとった構図が思い起こされる。それは、ドストエフスキーがチェルヌイシェフスキーの作品に対して、反ユートピアを掲げたわけでもなく、批判をするわけでもなく、根本的に異なる人間の本质を提示したのと同様に、『危機の二十年』においてカーは、思考の父である願望を否定することなく、事実の容認を提示するリアリズムの重要性とバランスの必要性を提示しているのである。

このように考えるならば、カーは現実主義者であったか、理想主義者であったかという、これまでのカーに関する議論は、まさに不毛であったとしか言いようがないことが明らかになる。

このように、『ドストエフスキー』の執筆を通じて、ロシア的精神とカーが解釈したものの影響を考慮するとき、カーのリアリズムは、これまで、西欧思想史の中で解釈されてきたものと、全く異なる意味と性質を持つことが明らかになる。そして、そのことは、カーの人物像に全く新しい解釈を提示する。

以上、カーのリアリズムの原型が、彼の著作『ドストエフスキー』の中に登場する『地下室の手記』に見出すことができることを示した。また、『危機の二十年』におけるカーの国際政治観は、西欧的な思想史や知識、もしくは常識からだけで解釈されるべきではなく、カーが『ドストエフスキー』を通してロシア的精神と解釈したものの影響を考慮することによって、新たな解釈がされうることを指摘した。

本稿は、西欧的思想がカーに影響を及ぼしたことを否定するものではない。しかし、カーのリアリズムに、ドストエフスキーの思想的影響があることを、本稿は提示した。

結語

本稿は、チェルヌイシェフスキーの著作『何をなすべきか』と、ドストエフスキー著『地下室の手記』が、カーの処女作『ドストエフスキー』のなかで、どのように対

比されているかを検討した。人間の非合理性を直視し、それを受容する必要性を打ち出した、ドストエフスキーの人間観に、カーが影響されていることを明らかにした。

そして、このように、虚飾を収去することと、事象をあるがままに受容するという思考の型が、『ドストエフスキー』が上梓された8年後の1939年のカーの国際政治学の著作である『危機の二十年』におけるリアリズムの中核となっていることを論じた。

『地下室の手記』に対する解釈でカーが得た、虚飾の収去がリアリズムの中核をなしていることを論証するために、本稿は、カーの著すリアリズムが一貫して、ユートピアニズムの願望に包含される虚飾を収去していくという、カーの議論の構図を検討してきた。

大部分の既存のカー研究は、『危機の二十年』が誕生する背景として、ドストエフスキーからのロシア的影響を考慮しなかった。その結果、カーを西欧思想史の領域内だけから研究してきた。しかし、カーの伝記作品を緻密に研究していくことにより、カーがロシア的精神と解釈したものに、多大なる影響を受けて、国際政治学の主著とみなされている『危機の二十年』の議論を構築していることを、本稿は、明らかにした。

今後の課題の一端としては次の事柄が挙げられる。

今後、さらに、カーが「倫理的問題」と呼んだ『罪と罰』、および、彼が「倫理的理想」と評した『白痴』に対するカーの解釈が『ドストエフスキー』の書中、どのように記されているかを研究することにより、国際政治学における国際道德の問題と、その理想についてのカーの考えが明らかになるであろう。『ドストエフスキー』執筆過程において、カーが影響されたロシア的精神に関するさらなる研究が必要とされている。

参考文献

一次文献

- Carr, E.H. 1931. *Dostoevsky (1821-1881): A New Biography*, London, Allen & Unwin.
— 1939. *The Twenty Years' Crisis: An Introduction to the Study of International Relations*, London, Macmillan.

二次文献

- Ashworth, L. M. 1999. *Creating International Studies; Angell, Mitrany and the Liberal Tradition*, Ashgate.
Ashworth, L. M. 2002. "Did the Realist-Idealist Great Debate Really Happened?"

- A Revisionist History of International Relations," *International Relations* 16 (April), pp.33-51.
- Ashworth, L. M. 2006. "Where Are the Idealists in Interwar International Relations?" *Review of International Studies* 32 (July), pp.291-308.
- Booth, Ken. 1991. "Security in Anarchy: Utopian Realism in Theory and Practice," *International Affairs* 67 (July), pp.527-545.
- Bull, H. 1969. "The Twenty Years' Crisis Thirty Years On", *International Journal* 24 (Autumn), pp.628.
- Buxton, C.R. 1936. *The Alternative to War: A Programme for Statesmen*, London, Allen & Unwin.
- Cox, M. ed. 2000. *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, Basingstoke and New York, Palgrave, 2000.
- Cox, M. 2010. "E. H. Carr and the Crisis of Twentieth- Century Liberalism: Reflections and Lessons," *Millennium: Journal of International Studies* 38 (May) pp.523-533.
- Davies, R. W. 2000. "Review Essay, Jonathan Haslam, The Vice of Integrity: E. H. Carr 1892-1982," *The Russian Review* 59 (July), pp.442-445.
- Dunne, T. 1998. *Investigating International Society: A History of English School*, Palgrave.
- Dunne, T. 2000. "Theories as Weapons: E. H. Carr and International Relations," in Michael Cox (ed.), *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, Palgrave, pp.217-233.
- Evans, G. 1975. "E. H. Carr and International Relations," *British Journal of International Studies*, 1 (July), pp77-79.
- Fox, W. T. R. 1985. "E. H. Carr and Political Realism: Vision and Revision," *Review of International Studies* 11 (January), pp.1-16.
- Fiott, D. 2010. "Carr's Quest: Escaping the 'Rules' of International Relations?" *ECPR Graduate Conference*, Dublin, Summer 2010.
- Gismondi, M. 2004. "Tragedy, Realism, and Postmodernity: *Kulturpessimismus* in the Theories of Max Weber, E. H. Carr, Hans j. Morgenthau, and Henry Kissinger", *Diplomacy & Statecraft* 15 (September), pp.435-464.
- Guzzini, S. 1998. *Realism in International Relations and International Political Economy: The Continuing Story of a Death Foretold*, Routledge.
- Haslam, J. 1999. *The Vices of Integrity: E. H. Carr, 1892-1982*, Verso.
- Howe, P. 1994. "The Utopian Realism of E. H. Carr," *Review of International Studies* 20 (July), pp.277-297.

- Johnston, W. 1967. "E. H. Carr's Theory of International Relations: A critique," *Journal of Politics* 29 (November), pp.861-884.
- Jones, C. 1998. *E. H. Carr and International Relations: A Duty to Lie*, Cambridge University Press.
- Mearsheimer, J. J. 2005. "E. H. Carr vs. Idealism: The Battle Rages On", *International Relations* 19 (June), pp.139-152.
- Molloy, S. 2003. "Dialectics and Transformation: Exploring the international Theory of E. H. Carr," *International Journal of Politics, Culture and Society* 17 (Winter), pp.279-306.
- Molloy, S. 2006. *The Hidden History of Realism: A Genealogy of politics*, Palgrave.
- Morgan, R. 1974. "E. H. Carr and the Study of International Relations," in Chimen Abramsky and Beryl J. Williams (eds.), *Essays in Honour of E. H. Carr*, London, Macmillan, pp.171-180.
- Nishimura, K. 2011. "E. H. Carr, Dostoevsky, and the Problem of Irrationality in Modern Europe," *International Relations* 25 (March), pp.45-64
- Rich, P. 2000. "E. H. Carr and the Quest for Moral Revolution in International Relations," in Michael Cox (ed.), *E. H. Carr, A Critical Appraisal*, Palgrave, pp.198-216.
- Schmidt, B. C. 1998. *The Political Discourse of Anarchy: A Disciplinary History of International Relations*, SUNY Press.
- Schmidt, B. C. 2002. "On the History and Historiography of International Relations," in Walter Carlsnaes, Thomas Risse, and Beth A. Simmons (eds.), *Handbook of International Relations*, Sage, pp.3-22.
- Smith, M. 1990. *Realist Thought from Weber to Kissinger: Political Traditions in Foreign Policy Series*, Louisiana State University Press.
- Thompson, K. W. 1980. *Masters of International Thought: Major Twentieth Century Theorists and the World Crisis*, Louisiana State University Press.
- Torbjørn, L. K. 2008. "A Lost Generation? IR Scholarship before World War 1", *International Politics* 45 (November), pp650-674.
- Wilson, P. 2000. 'Carr and his Early Critics: Responses to The Twenty Years' Crisis' in Cox ed., *E. H. Carr: A Critical, Appraisal*, Basingstoke and New York, Palgrave, pp,165-197.
- Wilson, P. 2001. "Radicalism for a Conservative Purpose: The Peculiar Realism of E. H. Carr," *Millennium: Journal of International Studies* 30 (January), pp.123-136.
- 遠藤誠治 2003. 『『危機の二十年』から国際秩序の再建へ—E. H. カーの国際政治理論の再検討(帝国・戦争・平和)』『思想』第945号。

- 遠藤誠治 2009. 「『危機の二十年』の現実主義論」『外交フォーラム』第22号2巻。
- 岡安聡 2000. 「『利益の自然調和』から『作り出す調和』へ—E・H・カーのユートピア」『青山国際政経大学院紀要』第12号。
- 川端末人 1951. 「国際政治の構想と変革—E.H.カーの国際政治学の紹介」『同志社法学』第9号。
- 河村しのぶ 2021. 「西村邦行著『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路—』に関する一考察」『総合文化学論輯』第14号。
- 喜多村浩 1954. 「E.H.カーの思想—とくに政治の資格を中心として—」『あるびよん』第22号。
- 角田和弘 2008. 「戦間期におけるE・H・カーの国益認—独伊政策を焦点として」『政治学研究論集』第28号。
- 角田和弘 2009. 「E・H・カーの『国際秩序』構想：平和的変革構想とその失敗」『戦略研究』第7号。
- 酒井哲哉 2007. 『近代日本の国際政治秩序論』岩波書店。
- 信夫隆司 1988. 「国際政治理論におけるリアリズムの擡頭（1）」『政経研究』第24号（二月）。
- 篠田英明 2003. 「国際関係論における国家主権概念の再検討—両大戦間期の法の支配の思潮と政治的現実主義の登場」『思想』第945号。
- 西村邦行 2010. 「知識人としてのE.H.カー：初期伝記群と『危機の二十年』の連続性」『国際政治』第160号。
- 西村邦行 2012. 『国際政治の誕生—E・H・カーと近代の隘路—』昭和堂。
- 西村邦行 2014a. 「第一次世界大戦から100年—E.H.カーから考える第一次大戦と現行—」『公明』第107号。
- 西村邦行 2014b. 「日本の国際政治学形成における理論〈輸入〉：—E.H.カーの初期の受容から—」『国際政治』第175号。
- 原彬久 1968. 「国際政治学の生成基盤—E.H.カーにおけるユートピアニズムとリアリズムの諸問題—」『国際商科大学論叢』第2号。
- 原彬久 1969. 「国際政治における権力の論理—E.H.カーの理論をめぐって—」、『国際商科大学論叢』第3号。
- 三牧聖子 2008. 「『危機の二十年』（1939）の国際政治観：—パシフィズムとの共鳴—」『年報政治学』第59号。
- 三輪宗弘 1988. 「E・H・カーの国際政治観の再検討—その『リアリズム』と『ユートピアニズム』について—」、『軍事史学』第24号。
- 山中仁美 2003. 「『E・H・カー研究』の現在の状況をめぐって」『国際関係学研究』第29号。
- 山中仁美 2014. 「西村邦行著『国際政治学の誕生：E.H.カーと近代の隘路』」『国際法外交雑誌』第113号。

- 山中仁美 2009. 「国際政治をめぐる『理論』と『歴史』—E. H. カーを手掛かりとして—」『国際法外交雑誌』第 108 号。
- 山中仁美 2007. 「『新しいヨーロッパ』の歴史的地平 —E・H・カーの戦後構想の再検討—」『国際政治』第 148 号。
- 山中仁美 2017a. 『戦争と戦争の狭間で』ナカニシヤ出版。
- 山中仁美 2017b. 『戦間期国際政治と E.H.カー』岩波書店。
- 吉川宏 1993. 「相互依存的世界における国民国家（二）—理論史的—考察」『法学研究』第 29 号。

[The Origin of E. H. Carr's Realism and the Influence of *Dostoevsky* on It.]

[KAWAMURA, Shinobu・元九州大学大学院法学府博士後期課程・日本翻訳連盟認定産業翻訳士・翻訳事務所代表・現在の研究テーマ：E・H・カーの国際政治思想]

本稿は、「E・H・カーのリアリズムの起源と『ドストエフスキー』の影響」『総合文化学論輯』第 15 号（2021 年 11 月 1 日）を 2022 年 5 月 17 日に改訂したものである。